

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0873 ◆◆◆

26/01/07

【 経験則からは重要な 1 月相場、今年も要注意 】

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。皆様にとって、良い一年でありますように。

昨年 12 月のドル/円相場は、月間変動が 3.44 円(154.34-157.78 円)。なんと、最後の最後にきて年間を通した 2025 年の月間最小変動を記録した。ちなみにワースト 2 位は 8 月の 4.46 円で、12 月はそれを 1 円以上も下回る。由々しき事態とも言えよう。

2019 年には年明け早々の 1 月 3 日、「フラッシュクラッシュ」と呼ばれるドルの暴落があったことを記憶している方も多いと思われる、当時のような「1 月大相場」を期待する声もあるにはある。しかし、巻き戻し期待の声よりも、ドル/円の変動が年間を通して落ち着いてしまったことを懸念する向きの方が優勢かもしれない。

◎昨年は「1 月高値」が「年間高値」に、今年も同様の展開なるか

今回の当レターでは、月初恒例である経験則から見た「1 月の月間見通し」をまずはレポートするが、最初に過去の 1 月相場の戦績を振り返ってみたい。1990 年以降昨年まで過去 36 年間で振り返った場合、勝率は 15 勝 21 敗だった。

確率的には 6 割を若干欠ける数値で、物凄くドル安・円高方向が有利というわけではないが、実は近年は平均を大きく上回る 8 割近くが「円高」に振れている。実際、2014 年以降という過去 12 年だけに限定すれば、ドル高・円安方向に振れたのは 2016 年と 2021 年、そして 2024 年の 3 回のみ。残りの 9 回はすべてドル安・円高に振れていた。覚えておいて、損はない経験則という気もしている。

そんな 1 月相場には、ほかにも幾つの特徴があるのだが、なかでも興味深いものとなると、以下の 3 つだろう。ひとつずつ順を追って説明していく。

最初に取り上げるのは、「月間を通した値動きが両極端である」ことで、動く年はかなり激しい価格変動を記録するものの、逆に動かない年はベタ凪状態が続くことも少なくない。前者の「よく動く 1 月相場」については、年明け早々の 3 日に、いわゆる「フラッシュクラッシュ」と呼ばれるドルの暴落を演じた 2019 年が思い起こされ、それもあってか同年は 1 月が年間でもっとも動いた月だった。さらにいえば、2017-19 年の 3 年はすべて 1 月が年間でもっとも動いた月だったことが確認されている。

それに対して、「動かない」という年も実は決して少なくないのだが、ここ数年の 1 月相場は比較的大きめの動意が目につく。ここでは、期待を込めて前月が「2025 年の月間最小変動を記録」——したことの反動を祈念しておきたい。

次に、一年 12 ヶ月を比べて見た場合、不思議なことにドル/円相場は年明け早々の「1 月に一年の天底をつける」ケースが非常に多い。

事実、1990 年以降昨年までの 36 年間で 16 回の「年間天底」を記録していた。そして、改めて指摘するまでもなく、昨 2025 年もまさにそれ。1 月 10 日に記録した高値 158.88 円が結局、昨年の年間最高値となった。そのほか、比較的喫緊の事例だけを取り上げても、2016 年と 2017 年は昨年同様 1 月に年間のドル最高値を示現しているほか、2013 年と、2019 年そして 2021 年から 2023 年までは 3 年連続で逆に 1 月安値が結局年間を通したドル最安値となっている。もちろん、毎年必ず起こる事象ということではないものの、非常に気になる経験則で、今年もやはり注意しておきたいところだろう。

たとえば、ドル/円がこのあと 160 円台に乗せる展開などがあったのち、当局の円買い介入で急落——などといった展開があったとすれば、記録した「160 円台」は、年末振り返ってみると今年のドル最高値だったということになるのかもしれない。

そして最後 3 つ目の特徴は、「1 月の月足陰陽と、年足陰陽が同じになる確率が高い」——ことになる。つまり、1 月の月足が陽線であれば、その年一年間は年間を通してドル高・円安に振れる公算が高く、実際に年足も陽線引けとなるケースが多く確認されている。

ちなみに、こちらについても 1990 年以降昨年まで過去 36 年間の戦績を調べてみると 23 勝 13 敗。確率と

▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の**無断転載・転送**もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。